

# ポエムの窓

文・高安ミツ子

# 翁の人生

高安義郎

ある時翁は夢に仏のお声を聞いた  
一人暮らしは淋しかろうから  
人形共に命と心と

むかしむかし遠い国の山の奥  
人形彫りの翁があつた  
小さな庭の片隅に  
壊れ人形の塚があり

墓にリリント星の降る晩は  
火を焚き炉端で

コツボリ コツボリ 人  
小鮎や猫が龍やらを彫り

ジジと Baba と孫共と  
きまつて翁の昔の家族を造つたものだ

卷之三

一人暮らしで淋しい氣に観客のない人形芝居が楽しみだった

鮎に好かれた庄屋の子猫は  
雪舟筆に思ひを歸せ二段

——龍神様に思ひを寄せで夜と夜を泣いた

——龍神様は鮎のみごとな泳ぎつぶりに魅せられ——

水と空と岸辺はいつも  
逃げて泣き追つて恨みの日が暮れ去

——それが愉快でジジとババ  
——孫共連れて見物に来る

お芝居はいつもそこで終わっていた

むかしむかし 遠い国の山の奥  
今もコン カリ

木彫りを刻む音がする

詩集「むかしむかし」より

そこで、今回は紹介者の一人高安義郎の詩を取り上げました。誰もが昔話を聞いた覚えはあります。人は、それらに郷愁を感じるのは何故でしょうか。昔話には誰でもが願う思いや民衆の持つてゐる生きるための知恵があります。が投影されているからではないでしょうか。今回紹介する作品は全て作者のオリジナルの昔話であります。作者は「ストーリーポエム」と称し情景の美しさや細やかな人の感情の起伏を詩で伝えたいと考え、昔話の形態をとつた作品を記しました。二連から孫を亡くした翁が登場します。翁は子供と孫を失つた哀しさを拭うように家族や鮒等の人形を彫つて人形芝居をして います。三連では、仏様は翁が彫つた人形に命の吹き込みを約束します。翁はうれしさで小躍りしますが五連では全ての人形を焼いてしまふのでした。翁は仏様の慈悲で蘇らせた仮さか初の現実への憂慮と失うことの苦しさを再び味わいたくない死生観が感じられます。家族を失つ辛さを運命として受け止めようとしています。そこには、生きることの戦いが続く翁の虚無感すら感じられます。終連では、昔話の世界に翁を戻します。そこからは、絶望や哀しみを背負いそれでも孫子への情愛を守り抜こうとする翁がどこかで生き続けているような余韻を感じさせてくれます。人生という時間内で人は得ることと失うことで人格が作られるのかもしれません。哀しい時、心に寄り添つて無言で抱えてくれる翁が何処かにいるような気がしてくる作品だと思えます。

ひとりで悩まず相談しよう！青少年相談機関のご案内 子ども家庭110番☎043-252-1152

<http://www.pref.chiba.lg.jp/kouhou/soudan/kodomo.html> (千葉県各種相談窓口(こども))

千葉県の運営する相談機関です。平日は午前9時～午後8時、休日は午前9時～午後5時に受付しています。児童虐待相談は24時間・365日受け付けています。